

徳島県立近代美術館企画交流室長  
森 芳功 の



新しい年  
の始まり  
の時間  
を  
楽し  
ま  
す

# 美術をたのしむ、美術館をたのしむ

## その94 演劇や音楽から美術をたのしむ

### 新年がはじまって一月

新年(二〇一六年)に入っても、一月が過ぎてしまいました。近代美術館の展覧会は、「人間表現を楽しむ25のとびら展」が終わり、新たな企画がはじまっています。「同時代のアーティストたちの表現」です(担当…吉原美恵子上席学芸員)。所蔵作品展の枠ではあるのですが、当館コレクションだけでなく、ソウル在住のユン・ソクナムさんが本展のために制作してくださった新作インスタレーションが展示され、見どころとなっています。タイトルは「ホワイトルームⅣ・私の母の庭」。まるで別世界に迷い込んだかのような真っ白な空間が見る者をつまみまします。

そのような新しい話題もいくつかあるのですが、前回に続き、「25のとびら展」をもう少しふり返りたいと思います。というのも、私が関わった「25のとびら展」は関連する事業が続いていて、いまも、文化の森ウインターフェスティバル(二月十二日)とその前後の時期に開くワークショップ紹介展示やワークショップ報告書の発行準備をしているからです。「25のとびら展」は、作品展示

だけでなく、地域の人が参加するワークショップや協働事業を行い、その成果を多くの人に広げる計画が評価され、財団法人地域創造の助成を得ることができました。そのため展覧会や催しを積極的に行うのはもちろん、次につなげて種をまくような活動が求められています。紹介展示や小冊子作成もその活動の二環であり、鑑賞や美術に親しむ活動に関心のある人に、成果を伝えていきたいと思っています。いままでになかったような新しい試み、地域の人たちと連携した取り組みも重ねています。

年も変わり展覧会も変わりましたが、そのようなことで「25のとびら展」のワークショップのなかから、もう少し紹介させていただければと思います。

### ひびくのとびら「演劇編」

四国学院大学の仙石桂子さんを講師にむかえた「美術のとびら『演劇編』」(二〇一五年十一月七日、主担当…竹内利夫上席学芸員)は、展示室にいつもとは違う時間が流れた印象的なワークショップでした。

演劇の手法を取り入れたもので、対象はシニアの方々。年

齢制限は設けませんでしたので、「シニア」というには少々若く思える方を含め、二十人の方が参加してくださいました。参加者は「25のとびら展」に展示されている作品の前で、それを表した作家になり切って演じます。仙石先生のゼミ生で演劇専攻の学生さん二人が、たまたまやってきた来館者の役になり、次々と「作家」と出会っていく流れです。

ピカソとなつて語る人、情熱的な画家を演じる人、木訥に話したり、苦悩をにじませたりする人も。参加者がそれぞれ作品を解釈し、作家について調べ学習の時間を持ちながら自分なりの役づくりをします。発表のときはそれらの演技がつながり、一つのドラマのように展開していきます。美術館にやってきた二人の若い女性が、展示室のあちこちであちこちで、時空を超えるようにしてさまざまな作家と出会い、作品の秘密を垣間見ていくのですが、入口から順番にではなく、いきなり奥のスペースに飛んだり、屋外展示場に出たりする変化にとんだ構成でした。

ワークショップの参加者たちは、他の人が演じているときは、

普通の来館者のように作品を鑑賞していますので、一般のお客さまは、誰がワークショップの参加者なのか分かりません。そのようななかで芝居が連関し、展示室が舞台にも客席にも変幻自在に変化していったのです。

一般の来館者には、ワークショップの発表時間を受付や看板で周知し、会場内でも記録係がビスタッフが「演劇中です」のゼッケンをつけてお知らせしました。当然私も、演劇ワークショップの発表があるのを知っていましたが、すぐ隣でお芝居が展開しますので、自分自身が舞台や映画の登場人物になったと錯覚するほどの臨場感がありました。展示室の空間と時間が変化したのです。

そのような体験をした後は、見慣れた絵や彫刻が別の表情を見せてくれるから不思議です。鑑賞と関わるさまざまな経験は、その人の記憶に蓄えられていくからなのでしょう。

参加した方のなかには、お芝居をしたのは初めてという方も、演劇経験を重ねている方もいましたが、みなさん充実した表情をされていました。美術作品を通して人と人がつながり、自身を表現できる場ができたのです。

私は、美術を楽しむことの可能性が広がったように思いました。

## びじゅつのびじゅい「音楽編」

二〇二五年十二月五日には、音楽教育の研究者、高木夏奈子さん(植草学園大学)を講師にむかえた「びじゅつのとびら『音楽編』」(主担当…亀井幸子係長)を行いました。アトリエで音楽を図形に置きかえる活動をした後、展示室に移り、美術作品を「楽譜」に見立てて演奏し、合奏につなげました。

採り上げた作品は、柳幸典〈20柱のハニワとわたし〉(一九九五年)。等身大のハニワが炎につまれるようすを撮影した写真二十点からなっています。等身大で再現した踊る人十体、武人十体のハニワを、重機でつくった前方後円墳に並べて野焼きするようすを一体ずつ撮影した作品で

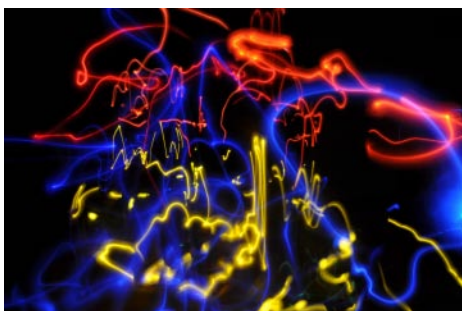


柳幸典〈20柱のハニワとわたし〉の鑑賞

す。戦後五十年の年に制作されました。(※本来は焼かれたハニワとともに展示しますが今回は写真部分のみの紹介です。)

ワークショップでは、二十点の写真のなかから参加者が気になるハニワを一点選び、それにふさわしい音を出します。筒にお米を入れてザー、ザーと音がするものや、簡単なつくりの打楽器など、手作りの「楽器」を先生が用意してくれました。

私も参加させていたいただいたのですか、二十点の写真のなかから、どのハニワを選ぶかで悩みました。踊る人も武人も手作りですので、一体ずつ表情がちがいます。炎につまれるようすも異なっていて、激しく炎に覆われているもの、焼かれて黒ずんだもの、火力が強く腕が落ちてし



「からだで描こう—絵のぐは光」

最後は、高木先生が曲を組み立てるようにしてまとめ、二グループで合奏を披露しあいました。作品を観るとき、人によつて着目点は異なります。ユーモラスな感覚でハニワを解釈した人もいました。ですがそれらが集まること

まったものもあります。そのなかで私は一番地味な子どものような表情の武人を選びました。やさしそうな人が刀を握りながら炎に耐えている姿が私の気持ち動かしかったです。

形としては、印象の弱いハニワといえます。図版を含めて何度も観ているはずなのですが、いまだあまり注目したことがなかったもので、それに惹かれた自分が不思議に思えました。私は、筒でできた「楽器」でカタン、カタンという静かな音を四〜五回だけ鳴らして演奏しました。参加者の方々も、それぞれ自分が気になったハニワをイメージし、激しく大胆な音を打ち鳴らす人、鎮魂の鐘のような音を演奏する人など、さまざまな音を出していました。

で作品の見方は深みをおびていきます。このワークショップでは、感じ方や解釈の多様性が音が集まるようすで体験できたように思いました。

私にとって、自分の感じ方を音に置き換えることで確認できたのも収穫でした。言葉にするのとは違う別の感覚が刺激され、作品の捉え方の幅が広がっていくように感じました。

## 「ワクワク—子ども編」など

その他にも、鳴門教育大学の子ども向けワークショップサークル、N\*CAPのみなさんによる「びじゅつのとびら」ワクワク—子ども編(二〇二五年十二月十三日)などがありました。テーマは「からだで描こう—絵のぐは光」。小学生対象のワークショップです。展示室で作品を鑑賞した後、光の絵を描きました。

部屋を暗くし、カメラのシャッターを数秒間開放にすると、手足につけたLEDライトの光がつながり、絵のようになるのです。子どもたちは四班に分かれ、工夫を重ねて完成作を見せてくれました。いろいろな表現方法を体験することで、子どもたちは感性の幅を広げ心の奥に

蓄えていくのでしょうか。この活動では、長い期間をかけてワークショップを準備した学生さんたちの努力も心に残りました。

その他、留学生と地域の人が交流しながら美術作品を観るワークショップ「びじゅつ」とびら「多文化編」など、書ききれないことがいくつもありました。すべては紹介できませんでしたが、それら催しの成果をまた次の活動に活かしていきたいと思っています。

## 2月の催し

■開館25周年記念「同時代のアーティストたちの表現」3月21日「月振休」まで

・展示解説 2月7日(日)、2月28日(日)、3月20日(日祝)

午後2時〜2時45分

・ミツアー 2月11日(木祝) 午前11時〜午後2時、午後3時〜

子ども鑑賞クラブ 2月27日(土) 午後2時〜2時45分

□文化の森ウインターフェスティバル 2月11日(木祝)

・美術館の催しは、「切り絵であそぼう」「ぬりえであそぼう」「同時代のアーティストたちの表現 ミツアー」

□25のとびらワークショップ紹介展示 2月10日「水」〜14日「日」 展示室3

・ウインターフェスティバル(2月11日)の日は、9時30分から17時まで開催。他の日は、受付でお問い合わせください。